

日本モダニズムの断絶—1920年代と1930年代—

折口立仁

1 はじめに

モダニズム詩の問題は、第一次と第二次の二つの世界大戦とヨーロッパと日本という関係が絡み合って複雑な様相を呈している。1914年から18年の第一次世界大戦で、軍隊だけではなく国を挙げての総力戦を戦ったヨーロッパとは異なり、参戦したとは言え遠い極東で被害も少なかった日本の状況は全く異なった。戦時特需の好景気によって急激な都市化が進み、戦後やってきた経済不況の中、労働争議や様々な新たな社会問題が生じた日本に、ダダイズム、アナーキズムなどヨーロッパのアヴァンギャルド芸術理論が流れ込み、既成の秩序や国家権力を否定・反抗する急進的な芸術運動が起こってくる。この時代の代表的な詩集が萩原恭次郎の『死刑宣告』であった。

1928(昭和3)年春山行夫、北川冬彦らが中心となり『詩と詩論』が創刊される。1930年代のモダニズムを代表する雑誌であり、運動の一大拠点となった。編集の中心であった春山らの考え方がヨーロッパのシュールレアリスムなどを形式的、観念的に導入し、感情、思想より言葉自体の形態、表現の技巧に偏っていたという批判を、第二次世界大戦後、詩誌『荒地』の代表的メンバーだった鮎川信夫から批判を浴びることになるのである。この1930のモダニズムと1920年代のモダニズムとの「断絶」が、今回取り上げたテーマだ。

2 海野弘の断絶論

評論家 海野弘の著書『モダン都市東京—日本の一九二〇年代—』(1983年10月中央公論社)の中に萩原恭次郎の『死刑宣告』を扱った章がある。そこで海野は次のように書いている。少し長くなるが抜粋引用する。

『死刑宣告』は二〇年代東京と萩原恭次郎との出会いによって生まれた稀有な作品である。(中略)『死刑宣告』後の萩原は、一九二七、八年ごろからプロレタリア詩へ、そして農村詩へと向う。これは二〇年代アヴァンギャルドの典型的なコースといえるかもしれない。この二〇年代と三〇年代の断絶を私たちはどのように考えたらいいのだろうか。ヨーロッパにおいては、ダダからシュールレアリスムへの移行は、たとえいくつかの衝突を含むにせよ連続的である。しかし日本ではそうではない。(中略)萩原の『死刑宣告』と入れちがいにシュールレアリスムがあらわれる。村山知義や萩原など、マヴォを中心とする二〇年代のアヴァンギャルドはプロレタリア芸術に流れこみ、壊滅する。シュールレアリスムをはじめとするモダニズム、その空白のうちに登

場してくる三〇年代のモダニズムは、二〇年代の日本のダダを受継ぐことなく、あらためてヨーロッパのシュールレアリスムを輸入して、そこからはじめるのである。二〇年代のマヴォのダダ、構成主義的運動が、三〇年代のモダニズムと断絶しているように見えることは、まったくおどろくべきことである。

萩原がうたった〈装甲弾機〉や、中央に高くそびえる〈日比谷〉は『『死刑宣告』で描かれた1920年代の東京のこと（※折口）』、日本のシュールレアリスムに引きつがれることはなかった。二〇年代の都市は失われたのであった。昭和元年または大震災から近代をはじめの歴史は、三〇年代のモダニズムから語りだす。二〇年代のアヴァンギャルドは架橋されることなく埋もれてしまうのである。（p.87）

1920年代から30年代へのアヴァンギャルド、モダニズム、シュールレアリスム運動の歴史的経過が簡潔にまとめられている。

海野は日本の1920年代を現代につながる都市生活というものが始まった時代ととらえている。これは、当然1914(大正3)年から18(大正7)年までヨーロッパ全土を巻き込んだ第一次世界大戦がその背景にある。史上初めての国家総力戦による国土の荒廃、多数の若者の戦死傷によるきわめて大きな社会状況の変化が、それまでの芸術・思想に疑念を抱かせ、革新的な変化が起こり始めたのである。日本はドイツに宣戦布告し戦争に加わったとはいうものの、損害は極めて軽微で、逆に日本経済は「大戦景気」と言われる空前の好景気を迎えることになった。戦争特需と言える工業生産の急激な拡大、重化学工業の発展が、日本の社会を大きく変化させた。しかし、好景気と深刻な不景気は背中合わせであり、経済不況は1920年代初めには、激しい労働争議を引き起こし労働運動が活発化、また女性の社会進出等々の社会問題も議論され始める。この結果として、首都東京に典型的な形で新しい時代の都市生活が生み出されることになったのだ。

こうした社会状況の中で、1925(大正14)年、萩原恭次郎の『死刑宣告』が登場する（描かれている都市情景は、関東大震災前(1923年)前の首都東京である）。まさに時代の申し子のように現れたこの詩集は、1920年代日本のアヴァンギャルドが単なる輸入思想ではなく、この時代に現れた日本の新しい都市生活の現実と切り結んだ状況を示している。しかし、その熱気は長くは続かず、1920年代後期から1930年代に入ると、世界恐慌や満州事変の勃発に伴い国内の政治的緊張が高まる中で、『詩と詩論』を中心に展開した春山行夫、西脇順三郎らのモダニズム（シュールレアリスム）の活動は、欧米の文学・思想の翻訳を媒介に国際的な知的潮流を取り込み、詩を社会的、感情的機能から切り離し、言語そのものの構造と響きに基づいて独立した一つの芸術作品として成立させようとする方向を探るようになる。こうして、二つの時代のモダニズム運動は、同じ「モダニズム」という名の下にありながら、大きく隔たったもの考えられるようになった。

このように、1920年代のアヴァンギャルド精神が1930年代のシュールレアリスムへと連続しなかった事実を海野は指摘したのだ。

3

海野弘の「断絶論」は、1980年代以降の詩史研究に少なからぬ影響を与えた。戦後直後から1960年代にかけての批評は、1930年代を戦後詩の直接的な前史とみなし、1920年代はほとんど顧みられなかった。問題とすべきはモダニズムの後期形態であり、高橋新吉や萩原恭次郎の実験は本流から外れた異端のように扱われてきた。

3 「断絶論」の現在

この問題は、今も議論されている。例えば、『現代詩手帖』2025年4月号では、「モダニズム詩再考」の特集を組み、その中で、「詩人たちの「連関と断絶」」と題した季村敏夫と高木彬による対談記事が掲載されている。

ここでは、先に発刊された『一九二〇年代モダニズム詩集』（季村敏夫・高木彬 編 2022年4月思潮社）と『一九三〇年代モダニズム詩集（矢向季子・隼橋登美子・冬澤弦）』（季村敏夫 編 2019年10月みずのわ出版）を念頭に、神戸の文学運動「神戸モダニズム」を取り上げて議論が進められている。

季村、高木の両氏も、既存のモダニズム詩史が1930年前後のシュルレアリスム詩を中心に語られがちなことに疑問を持ち、あえて1920年代に焦点を当てたと語る。季村は、1920年代と1930年代の間の断絶を「かなり深い峡谷」と表現している。高木は、『一九二〇年代モダニズム詩集』の編集意図について、1920年代モダニズムが、その後始まる瀧口修造らのシュルレアリスムとの連関と接続の研究の一助になるよう、と『一九二〇年代モダニズム詩集』の編集意図を語っている。これまで散逸していた詩篇や未詳だった1920年代詩人の経歴を発掘し、詩史の中で見落とされがちな彼らと1930年代との比較研究の基盤を整備することによって、その位置づけを再考しようという試みである。

一例を挙げたが、先の海野弘の「断絶論」の問題提起は現在も有効であり、むしろ近年は資料発掘やテーマ別研究によって、断絶の構造と其中的連続性を精緻に見直す方向に進んでいる。

4 吉本隆明の「不定職インテリゲンチャ」と戦前モダニズム詩

吉本隆明は「戦後詩史論」（『増補 戦後詩史論』（1983年10月大和書房））の中で、この問題に触れている。

昭和初年から展開された日本の現代詩と、詩人たちの仕事は、作品の内容や質によってよりも、詩人である実体によってしかおし測れない問題を含んでいる。（p. 6）

昭和初期の現代詩は、単に作品の質や流派（ロマン派・シュルレアリスム・リアリズムなど）で論じきれず、詩人の実体（生活・遍歴・社会的地位）が詩の理解に不可欠だと考えられ

ることだとし、「日本現代詩の特長は、そこから発生しているとしかおもいようがない源流が、その曖昧で混沌とした、詩として理論づけが困難なところにある」と言う。

ここで吉本は、1920年代のモダニズム詩人たちを特徴づける社会的基盤として「不定職インテリゲンチャ」という概念を提示した。小熊秀雄、岡崎清一郎、山之口獏、草野心平、尾形亀之助、逸見猶吉、淵上毛銭などを例に挙げ、彼らは定職を持たず、都市の周縁で行商や人夫など零細な職を転々とした層に属していたとし、彼らを「不定職インテリゲンチャ」と称し次のように言う。

昭和の日本の社会がうみだした、下層庶民社会にその日ぐらしの不定職を求めるインテリゲンチャ群は、社会にたいし何をもたらし、どこへいったのだろうか。それを嚴重にさぐることはきわめて難しいが、すくなくともそのインテリゲンチャ群は、わずかな露出岩の一つとして現代詩の歴史のなかに登場し、生活遍歴と想像力のからみあった無類の曖昧性と多義性をもたらしたのである。(p.10~11)

「不定職インテリゲンチャ」の例として挙げた詩人たちの間では、「その生活遍歴と想像力のからみあった多義性や、混沌性は質が異っている。いいかえれば昭和の日本の社会から疎外されたものの自己表現は、その質においてたくさんの傾向をはらんでいる。」ということになる。そして、その詩史における意義として、吉本は次のように評価する。

この複雑多様さを類型づけているのは、昭和初年の日本の社会が、多量にうみだした、下層庶民社会にその日ぐらしを強いられた不定職インテリゲンチャが、自分が社会から疎外された意味を、どう考えてゆくかという態度によって決定されている。(中略)これは左派、これは右派であると規定できないのであって、ある時期の履歴がしめす事実のとおり、昭和の日本の社会が、疎外者としてうみだした不定職インテリゲンチャとして、共通意識と共通基盤をもつものであった。そしてこの共通意識と基盤を、詩的想像力とあわせることによって、戦後詩と截然と区別される多義性とあいまい性と混沌性を現代詩の世界にもたらしたのである。(p.13~14)

吉本は、この「不定職インテリゲンチャ」を「社会が高度化の過程でうみだした疎外者群」とし、一方、西脇順三郎、北園克衛、村野四郎、春山行夫、竹中郁などは、教授、編集者、会社員など比較的安定した職業や経済的基盤を持っていた者は、「社会の高度化がもたらした社会機構の内側の構成員だった」とする。そして、次のように言う。

これらの詩人たちは、高度化した社会のメカニズムを、主として生活様式または社会様式の変化として感受したところに、その特徴があったとかがえる。この地点から詩的想像の世界を、詩的様式の世界の探求として構成していったのが、おそらく共通した特色であった。(p.15)

そして、これら 1930 年代のモダニズム派の詩人たちについて、厳しい評価を下す。

詩的想像の世界を、自己の生活意識圏からははみ出させようとしなかったことは、日本のモダニズムの著しい特色であった。この点に関してはモダニストの想像力は、やむをえずもがきながら自己の生活圏から脱出しようとして翼をもたねばならなかった不定職インテリゲンチヤの詩人たちよりも貧弱であった。(p.16)

吉本は、1920 年代と 1930 年代の「断絶」について（彼自身は「断絶」という言葉は使っていない）、一つの示唆を与えてくれている。長くなるが引用する。

かんがえられる社会的な変動は、戦争につれて不定職インテリゲンチヤ群が、ぐんぐんと日本の社会から消滅していったことである。したがって、不定職インテリゲンチヤ群のひとつの露出したピークとしてあった現代詩人たちの底辺は、消滅せざるをえなかった。これはせちがらく厳しい社会がはじまったことでもあるし、同時に職もなく社会からおちこぼれる境涯から脱してゆく機会の出現でもあった。かれらのあるものは、職をえて大陸へでかけて文化宣伝に従事し、あるものは南方へでかけて軍報道の一翼をになった。また、あるものは戦争による生産拡大につれて定職をえ、それにつれて社会にたいする不定意識をいつか消失し、いわば日常社会人に転換した。かつてのルンペン的反抗や無頼的彷徨のかわりに日常の生活がおとずれた。しかしかれらが、ほんとうに日常生活人となりえたのかどうかはうたがわしい。かれらの社会にたいする不定意識は、このとき生活意識の倫理化にむかうよりも、風雲をのぞんで戦争へ戦争へとながれていったのである。(p.25～26)

これは、1920 年代と 1930 年代のモダニズム詩を比較する際の詩人の生活基盤や職業的立場を含めた社会史的アプローチと言える。

ダダイズム、シュルレアリスムも含めた広い意味でのモダニズムは、歴史的に見て明らかに 20 世紀の二つの大戦の産物である。これらの戦争は、国民総動員の総力戦であり、多くの国民大衆の生命・身体、生活基盤に圧倒的な破壊力を及ぼした。文芸作品と社会変動の関係が露わに見えてくる場所がモダニズムの歴史だと思える。

5 最後に

モダニズムについて考える時、日本の 1920 年代から 30 年代の社会変動は極めて大きいものだったのだという思いをあらためて深くする。吉本の言う「不定職インテリゲンチヤ」の運命と 30 年代モダニストとの隔絶は、詩人というものの限界を見せつけているのかも知れない。戦後詩は、それを乗り越えようとしてきたが、どこまで来たと言えるのだろうか。

私としては、ここを出発点として、現代詩にまつわる様々な課題についてさらに考えて行こうと思う。（了）